

環境対策活動 EarthCare



RISING SUN ROCK FESTIVALをはじめとした5つのイベントで環境対策活動を実施し、「Do It Yourself」を発信。また、北海道大学と共に河川沿いのポイ捨て防止に向けた社会実験や、東洋製罐との意見交換会を実施し、プラスチック問題に対してどのようなアクションが出来るかグループワークを行っています。(もが)

サイクルシェアサービス ポロクル/モビリティについて考える会



ポロクルの現場運営では55人のクルーと共に217日を駆け抜けました。モビリティについて考える会では、Town Picnicにて自転車のヘルメットに関する啓発ブースの出展やアンケート調査を実施しました。また、廃棄自転車ゼロを目指す「ゼロチャリ」の一環として自転車の修理・メンテナンス講座を行いました。(JAPAN)

都市の若者と森林をつなぐ プロジェクト「NINOMIYA」



生産拠点での活動は再開目処が立っていませんが、新割り体験提供は変わらず高いニーズで求められています。3年目の栗山町連携では現地で新割り活動体制ができ、今後は町内住民向けを目指します。また、企業向けの研修としての新割り・焚き火体験にも関心が高まっており、提供できるプログラムを再整理しています。(てつ)

見える循環 RSRオーガニックファーム



RISING SUN ROCK FESTIVALで4年振りにオーガニックじゃがいもの配布を実施しました。見える循環について来場者に伝え、みんなでおかえりじゃがいもを頂く、この取り組みを待ち侘びていた来場者も多く見られました。また、昨年引き続きじゃがバターの販売も行いました。(リオ)

関係人口創出プロジェクト 179リレーションズ



道内各地で地域での活動への参加・企画、自然保護活動や子どもの体験活動、オンラインイベント等を実施。昨年引き続き12月にオンライン関係人口フェスティバル「リレーションズフェス」も実施し、現地での活動が減る冬季において地域や団体間、参加者間など多様な立場から交流・意見交換ができる機会になりました。(ひろと)

石狩市浜益区で関係人口創出 浜益ベース



石狩市浜益区にある滞在型活動拠点はますますベースを中心に「快適でサステナブルな田舎暮らし」をテーマにしたはまますベースの整備や読書会、特産品を使った料理作りなど浜益に関わるきっかけを作るものから、きむら果樹園でのさくらんぼ収穫などのお手伝い、お祭りへの参加などより地域に深く関わる活動も行いました。(みさき)

「皮なめし」を切り口に「エゾシカ」問題に触れる EZOWOLF STORY



シカ革なめし部からEZOWOLF STORYへと変わり、革なめしの一部やレザークラフトの体験などを通して、エゾシカの背景や現状を伝え、共生を考えていくものになりました。上記以外にも、シカを切り口に地域と関わるプログラムも実施しました。予想していたよりも関心・参加者も多く、嬉しさと驚きのある1年でした。(しん)

北海道の自然の中で子どもたちに生きる力を 石狩体験キッズ「チボロ」

自然体験活動の企画・実施は休止し、今後について検討を続けていきます。連携団体等との活動は随時実施しています。(てつ)

研修部 GREENCOLLEGE

コアスタッフ向けにボランティアコーディネーターやコミュニケーションといったテーマを中心に研修事業を実施しました。(てる)

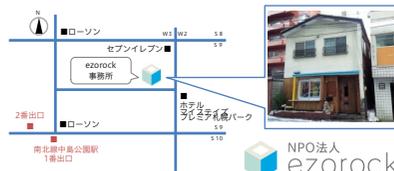
代表の小言

活動で見える必死さ

2011年夏、福島第一原発の事故の影響を受けた子どもたちを守るため、「ふくしまキッズ」がスタートしました。北海道をはじめ全国各地で、春、夏、冬の長期休みに福島の子どもたちを受け入れました。最も多い時には約500人の子どもたちが、20泊、延べ1万泊という規模感。私たちは、子どもたちが思いっきり遊べる環境をつくるために、北海道各地で大学生などに参加を呼び掛け、活動に加わってもらう、参加した大学生も、周りの大人も、余裕なんてなく、とにかく全力でした。

それから約12年、一人の高校3年生が団体説明会に参加しました。どうやら当時「ふくしまキッズ」に参加していた小学生で、今は福島に住んでいるが、4月から札幌の大学に進学する予定とのこと。あの時お世話になった大学生がかっこよかったと感じ、その団体に興味を持って参加したそうです。かつこよかったかはわからないが、大人の必死な姿が次の世代には魅力的に映ったようです。スマートフォンが評価される時代ですが、「必死さ」をもっと見せてもいいのかもしれません。

草野 竹史



エゾシカの皮の活用から人と野生動物の共生のあり方を考える

EZOWOLF STORY

号の写真 浜益滞在型活動拠点でエゾシカの加工を行っている様子。

EZOWOLF STORY

エゾシカの皮の活用から人と野生生物の共生のあり方を考える



エゾシカを取り巻く歴史と現状

ここ数年、北海道内のエゾシカによる農林業被害額が増加している。かつて、絶滅寸前となったエゾシカがここ数十年で大きく増えたためだ。エゾシカが増えたことによる影響は農林業への被害のみならず、自動車や列車との衝突件数の増大など、私たちの暮らしに大きく関係している。

明治に入り、北海道の開拓が進む過程でエゾシカが多く捕獲された。開拓資金を得る目的で、エゾシカの肉や皮が輸出されていた。開拓時の森林伐採によってエゾシカは住む場所を追われ、また、1879年冬の豪雪と暴風雨による大量死が発生したことで大きく頭数を減らすこととなった。その後、禁猟をすることで、個体数の回復を図り、1990年代から個体数が大きく増加していく。

現在では、道内でエゾシカは約70万頭生息していると言われ、毎年10~14万頭ほどが捕獲されている。その一方で、捕獲されたエゾシカの活用は進んでおらず、特に肉以外の骨、角、皮などはほぼ廃棄されているのが現状である。特に、皮を活用するためには「皮なめし(※1)」の工程が必要だが、北海道内には皮なめしを行う工場が少なく、特に毛皮なめしを行う工場がメインで、革に加工する皮なめし工場が数えるほどしかない。そのため、本州の工場に依頼することがほとんどであり、手間やコスト面からほとんどの皮が廃棄処分とされているのが実情である。



▲エゾシカ(右)だけではなくヒグマ(左)をなめしたことも

EZOWOLF STORYとは

プロジェクト名になっているEZOWOLF(エゾオオカミ)はエゾシカの歴史と関連している。エゾオオカミは日本人がはじめて絶滅させたと言われている種である。絶滅の理由の一つが、人間による駆除である。元々、エゾオオカミはエゾシカを獲物の一つとしていたが、北海道の開拓が始まることでエゾシカが減少、それによって、家畜を襲うようになってしまったため、駆除の対象となった。1879年の豪雪によるエゾシカの大量死もあり、絶滅してしまった。

元々、北海道に開拓に入る前は、エゾシカとエゾオオカミの両方で頭数の釣り合いが取れていたところに、人間が入り込んだことで大きくバランスが崩れてしまった。

EZOWOLF STORYでは、エゾオオカミの絶滅などエゾシカを取り巻く歴史と環境を切り口に、自然環境と人間の関係について伝えていく。北海道の自然環境と生物多様性、人間と野生生物の共生のあり方について考えることを目的に活動を展開している。

※1：動物の皮の乾燥による硬化と腐敗を防ぐ処理のこと。この処理を行うことで「革」となる。

「なめし」から「裏すき」へ

EZOWOLF STORYの活動は主に二つ。一つは、「裏すき」という作業である。2021年度から始まったこの活動は、エゾシカの皮をなめしてレザーとすることを目標としてスタートしたが、結果として技術や設備不足でレザーにすることは難しかった。ハンターとの意見交換の中で、皮なめしの最初の工程である「裏すき(余分な肉や脂肪を除去する工程)」に手間がかかることが皮の活用のボトルネックであるとわかった。裏すきは特別な技術や経験が必要な工程ではなく、多くの人が関わることができる工程である。実際に皮の活用に自分で関われる活動だ。裏すきが終わった皮は、なめしを経て革となる。この工程は人や自然環境に配慮したなめしを行っている道外の企業に委託している。

活動のもう一つは、クラフト体験である。なめしを経てできた革を使用した体験ワークショップである。キーホルダーやしおりなどの簡単な小物を作成することができる。

自分で裏すきしたエゾシカの皮を出口となる製品作成まで関わり、人間と野生生物の共生を考えながら、エゾシカの皮を活用していく。



▲裏すきの作業の様子

Volunteer voice

シカ革なめし部に、「エゾオオカミ」というエッセンスが加わっただけでここまで変わるものかと驚きました。プロジェクトが目的や形を変えてどうなっていくか、参加してもらえるのだろうか、よくわからないまま動き出しましたが、たくさんの方に参加してもらえたり、イベント出展も何度もでき、レザー製品も買ってもらえ、予想を超える1年でした。また、プロジェクトのこと誰かに伝えること、誰かと一緒に動くことの難しさ、自分の未熟さ、ものづくりと向き合う大変さを再認識・痛感した1年でもありました。

来年は、今年を土台に、たくさんの方に参加、継続的な関わりができるプログラム・プロジェクトにしていけたらと思います。



田中慎之介(しん)



▲なめした革でクラフトをする様子

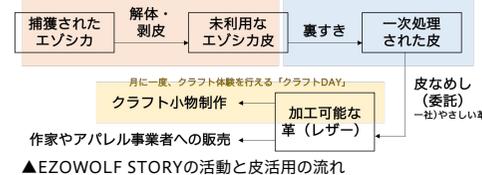
EZOWOLF STORYのこれから

EZOWOLF STORYは、活動の中で実際に手を動かしながら、自然環境と人間の在り方について考える体験を行う。併せて、北海道産の未利用資源を活用可能な形で提供できる仕組みづくりも行って来た。前述のように、多くが廃棄されるエゾシカの「皮」を、柔らかく加工できる「革(レザー)」として使えるようになったのだ。EZOWOLF STORYでは、レザーの販売も行っている。実際に2023年度は、アパレルブランドと連携したエゾシカレザージャケットの制作やクラフト作家へのレザー販売を行った。今後も、産地、加工したハンターの顔やタンナー(なめしを行う職人)の顔が見える北海道産の原材料に、なぜ狩猟が行われるのか、野生動物と人間がこれまでどのような関わりを持ってきたのかという背景をのせて多くの人へ届けたい。野生動物や自然に関心のある層だけではなく、レザーやクラフトの切り口からもプロジェクトに関わることができるのが、EZOWOLF STORYの大切な要素だ。



▲「皮」を加工してきた「革(レザー)」

ハンターを助けるシカについて学ぶ「じぶんレザープログラム」皮なめしの一部に関わる「裏すきプログラム」



▲EZOWOLF STORYの活動と皮活用の流れ

EZOWOLF STORYのWEBページができました!

EZOWOLF STORYの活動紹介や活動レポートを掲載中!今後は、インタビュー記事なども順次更新していく予定です。ぜひご覧ください!

